推しと旅する世紀末

オコSunday

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バイオハザードのような世界で俺は君を守る。

※これはＩＲＩＡＭとゆう配信アプリにて最推しによる最推しの為の小説。つまりは自己の妄想を爆発させた作品でございます。それでもいいならようこそコチラへ♪

――あと名前を出した本人からは確認済みです

目次

第一話【推しを迎えに】――1
第二話【脱出ｏｒ探索】――4
第三話【決意】――8
第四話【邂逅】――11
第五話【絶体絶命】――17
第六話【隻腕】――21
第七話【仲間】――24
第８話【喪失】――28
第８．５話【小倉あんこの追憶】
37
閑話【日常編】――44
第９話【救済】――49

第一話【推しを迎えに】

謎のウイルスによって人々が蠢く肉塊と化し、荒廃してしまった世界。そんな世界で俺は今日も今日とて醜く生き足掻いている。

だが今回は少し事情が違う。辛うじて起動しているSNSを通じてにある場所へ助けにもとい、お迎えに向かっているところだ。……めっさ長距離だけども。

「Fooooooooooooooo!!!!!!風が気持ちいいぜぇぇぇぇ!!でも腐った臭いぃぃいいぃいぃいぃ!!」

パンデミックの影響により、大破した車の波をバイクで駆け抜けながらヤケクソ気味に叫ぶ。ゾンビは大丈夫かって?アイツら動きはのろいから捕まらなければ無問題。なんならこっちはバイクだ。余程のことがない限り追いつかれることはまず無い。

バイクを走らせること約半日。道中色々……ホントに色々あったけどもう少しで目的地だ。すでにここから指定されたショッピングモールが見える。——蛇足ではあるが、合流するとゆう名目で迎えにいくので、武器などは余分に持ってきてある。

さて、そんなこんなで目的地に着いた訳だが……めっさゾンビおるやん……。とりあえず着いたことだし、SNSに到着したことを送信する——秒で帰ってきた。

〈屋上にいます！ドアの向こう側でゾンビが沢山いるのでそちらに行けません!!助けてください
（；ω；）〉

どうやら屋上にたてこもってるらしい。ものすごくメンド――困ったことになった。それはお迎えに行く道中、アイツらを接客しながら5階上の屋上まで迎えに行かなきゃ行けないとゆうことだ。

――え？接客じゃなくてぶっ飛ばすんだろだって？……相手するって意味では同じじゃい！皮肉で言ってんだよこんちくしょうめぇ!!

「ＨＡＨＡＨＡ！いらっしゃいませお客様ァ!!残念ながら本日限りをもって当店は閉店致しましたァ！お残りのお客様は速やかに土に御還りくださいませェ!!」

ヤケクソ気味に、しかし的確に頭部をバールで破壊しながら止まっているエスカレーターを駆け上がる。何度でも言うが、奴らは動きが遅い。力こそ強いがそれさえ気をつければ狙うのは容易なことだ。

「おいーっスおぐりん！オニイサンがお迎えに来たゾー!!生きてるかーい!!」

若干うっぷんが溜まっていたので、屋上のドアを全力で蹴破り辺りを見回す。貯水タンクの近くにいた。服は多少汚れたり所々破れたりしているがそこには確かに生きている女性が――

「やっと来てくれたー！遅いですよぉ!!」
「げぼぁ!!」
お、お腹におぐりんの頭部がダイレクトに……吐きそ。いや、朝から何も食ってないから吐くもクソもないんだけども。
飛び込んできた張本人を見下ろすと、小さい体をガタガタと震わせながらすすり泣いていた。――無理もない。女性1人で数日とはいえ、アイツらがすぐそばで徘徊しているのを耐えていたのだ。そうとう精神をすり減らしていることだろう。
「大丈夫、俺が来たからには嫌と言っても生かすからな。文句は受け付けておりませんのでご了承のほど」
「グスッ……ふふっ、なんですかそれ？でも……アナタらしいですね。ありがとうございます」
すすり泣くおぐりんの背中を、ポンポンと一定のリズムで優しく叩きながらおちゃらける。そんな俺のいつもの様子に安心したのか、目尻の涙を拭い笑顔を見せる。
――とりあえず今は新しい拠点探しを行きますかね。……でもその前に、
「……笑顔のおぐりん尊いゴフォ!!」
「ええ!?ちょっと!?しっかりしてください!!」

第二話【脱出ｏｒ探索】

「だ、大丈夫ですか？」
「ゴフゥ……、大丈夫だ問題ない」
「あの、むしろ問題しかなさそうなんですが……」
　危うく尊みで浄化しかけた所をなんとか持ち直して、こちらを心配そうに見上げるおぐりんに無事の有無を伝える。何故か物凄く呆れた目で見られたが、我々の界隈ではご褒美ゲフンゲフン…。
　……さて、いつまでもこの至福の時間を味わっていたいけども状況が状況だ。この場所はかなりの物資に恵まれてはいるが奴らの数が尋常じゃないほど多い。ずっとここにいるのは賢明な判断とは言い難いため、新たな拠点を求めて脱出することにした。
「おぐりん、とりあえずコレで自衛してくれ」
「……スコップ？これでなにをすればいいんです？」
「コイツの先っちょでアイツらの首をチョンパ」
「無理です!!」
　そうか無理かぁ……しょうがない。それなら俺がおぐりんを守りつつ、アイツらに突

貫して退路を開くか。

――数十分後――

そんなこんなで道中邪魔してきたヤツらを、この万能器具であるバールで速やかに御還りいただいてもらいながらようやく脱出に成功。後ろでおぐりんが青い顔をしながら口を抑えているが……スルーしておこう。どうせ嫌でも慣れることになる。

駐輪したバイクの元へ向かうと、周りにはそれなりの数のゾンビ共がたむろっていた。こっちはおぐりんを迎えに行ったり、脱出したりでかなり体力を消耗しているし、なにより毎回毎回ヤツらの相手をするのは面倒だ。前々から用意していた防犯ブザーの1つを鳴らして、バイクより少し離れた場所へ投げる。……よし、いい感じにいなくなったな。

「おぐりん！早く後ろに乗って！」

「はい！」

「俺にしっかり掴まって！」

「こうですね！」

おっふいい匂い……、じゃねぇ!!

背中に感じる至福の感触といい匂いをもっと感じていたいゲフン！ゲフンゲフン!!

……失礼。

おぐりんを後ろに乗せ、バイクを急発進させてその場を後にした。街道に出てからしばらく走らせていると、なんとも独特な雰囲気を放つ店が目に入る。
「なぁ、おぐりん。これってなんの店？物凄い独特な雰囲気を感じるんだけど…」
「え？……あぁ、ここはガンショップですね。色んな種類の銃が売ってるんですよ」
「は？ガンショップ!?このご時世に!?……よく営業できてたな」
なんとゆうご都合主義……。いや、ここは運が良いと思う事にしよう。じゃないと色々と面倒な気がする。
店の前にバイクを停め、店の中へと入る。銃の名前は分からないが、種類豊富でかなりの数の銃が置いてある。
「うぁあぁぁぁ…」
「そォい!!」
入店すると同時に横から初老のゾンビが襲いかかってきたので早急に御還りいただく。…あっぶね！ドア開けた途端にコンニチハってか。少しでも引っかかれたりしたらそこから菌が広がって1発でオダブツだ。改めて気を引き締めないといけないと実感した。
「あのぉ…、逆にあの状況で的確に迎撃してましたよね？どんな反射神経してるんですか？」

後ろからジト目で見られているがスルー。――あえて言うなら経験です。そのうち嫌でも出来るようになるヨ！（遠い目）

目の前の障害も排除出来たので改めて中を物色。

拳銃、マグナム、機関銃、サブマシンガン、ライフル等々……様々なジャンルの銃火器が置いてある。いや、なんでホントにこんな種類豊富なの？よく国から営業ＯＫ出たな。そこんところホントに謎なんだが……。

そこ後、俺はマグナム。おぐりんは機関銃＆サブマシンガンを選んでその店を後にした。

――その後…

「あはははははァ！見て見てオコ様！どんどんゾンビが減っていってますぅ！」

「おぐりん!?」

第三話【決意】

　おぐりんが機関銃ブッパのトリガーハッピー状態からようやく戻ってきたその後、俺達は無人の教会を新たな拠点として疲労を回復していた。――ここの教会は人影すらなかったが、幸いにもゾンビの一体もいなかった。何故かは分からないが、ゲームで言う安全地帯のようなものだと自分を納得させる。

　侵入されそうな窓も全て塞ぎ、今は真上のステンドグラスが日光で神々しく俺達を照らしていた。

「あの……本当にすいませんでした。……かなりご迷惑をおかけしてしまって……」

「いや、別にいいんだけどさ……、それよりもおぐりんが発砲した瞬間のあの光景に驚きすぎて色んなもんがふっとんだんだが…」

「うう……わ、忘れてくださいッ」

　さっきの事が頭から離れず、思わずジト目で見ると、おぐりんが恥ずかしそうにもじもじとする。……恥ずかしがってるおぐりん可愛い……っじゃねぇわ！毎度毎度しっかりしろ俺ェ!?――と、自分との葛藤で身悶えしていたが、隣でうつらうつらと船を漕いでいるおぐりんを見て正気に戻った。

あのショッピングモールに1人で数日間耐えていた事もあり、あまり眠れていないのだろう。今回は俺も長旅だったこと、それにおぐりんを迎え&脱出の時のゾンビ戦でかなり体力を消耗している。しばらく休んでもバチは当たらないだろう。

「おぐりん、無理せずに寝ときな？今はアイツらもここに襲ってくる気配はないし、なんなら俺も見張っとくからさ」

「はい……すみません。それじゃあご厚意に甘えさしてもらいます……。…すぅ…すぅ…」

「え？ち、ちょっとおぐりん!?……秒で寝たし」

いや、確かに寝てもいいと言ったのは俺だけどさ、まさか俺の膝を枕にするとは思っても見なかったなぁ…。……クッソ、寝顔が可愛い過ぎるんよぉ…。

「すぅ…すぅ…、うぅん…」

「……はは っ」

推しの可愛いさに思わず浄化しかけたが、安心した顔で眠るおぐりんの寝顔を見て微笑する。髪が顔にかかって寝ずらそうにしていた為、髪を手櫛で梳かしながら優しく頭を撫でていく。

建物自体の造りもあってか、ここは外の音があまり入ってこず、室内の温度もちょうどいい。……少し眠くなってきた。寝顔につられて欠伸が出てきたので、俺も仮眠をと

る事にする。それなりの食料品はリュックサックに詰め込んでいることだし、物資の調達は休憩した後でも十分だろう。

――おぐりん……大丈夫、心配することはないよ。アンタの命は俺が絶対に守るから。……たとえ俺がどうなろうとも。

ステンドグラス越しの日光のほのかな温かさに照らされながら、俺は決意を心に刻んで静かに目を閉じた。

第四話【邂逅】

新しい拠点を確保してから約半月。あれから物資の確保や、安全地帯の拡張作業、それに伴った野菜畑作り等、わりと充実した毎日を過ごしていた。色々あったが今はそれなりに安定した暮らしをしている。

『あははー♪どんどん撃ちますよー！汚物は消毒ですー♪』

『おぐりん前に出過ぎィ!!あと無駄撃ちし過ぎィ!!』

――別の日。

『今日は安全地帯の拡張をします。おぐりん？分かってると思うけど、くれぐれも弾の無駄遣いは……』

『あ♪ゾンビー♪』

『おいいいいいい!?話聞いてたぁぁぁぁ!?』

――またまた別の日。

『はい、弾の無駄遣いで残り弾数が心許なくなってきたので、今日は近接戦闘でのお勉強となります』

『……は～い』

『おいコラ、明らかにテンション下げるんじゃないよ』
『いや、説明しながら片手間にどんどんゾンビなぎ倒してるオコ様に言われましても……』
『最終的にはここまで出来るようになってもらいますよー？』
『普通は無理ですからね!?』
……本当に色々あったなぁ（遠い目）
まぁ、その代わりにお釣りが帰ってくるほどの収穫もあった。物資の充実もだが、戦闘面で心強い仲間が出来たのである。世界がこんな風になる前にＳＮＳで知り合っていた人だ。
その名も【ミレア】。狙撃術に長けており、スナイパーでの一撃必殺を得意としている。体の細さや、体格で一見女の子に見えるが……男だ。……男なのだ。大事なことなので二回言った。俺とおぐりんは初見で女の子と間違えて、その後びっくりしたのはいい思い出である。
「オコサンデぇー、とりあえず近辺を彷徨いてたゾンビは全部やっといたからー」
「ありがとうミレア。……ちなみに弾の消費量は？」
「計１４発。全弾命中一撃処理」
「うん、パーフェクト」

流石はミレア。的確に弱点を狙い撃つその技術……惚れ惚れしちゃうね！そこにシビれるあこがれるゥ！え？おぐりんも銃使えるだろって？……あの子は癒し枠だからいいんだよ（目逸らし）

ん？皆の名前が独特過ぎるって？そりゃそうだ。だってＳＮＳで使ってた名前だからな。誰がいつ死ぬか分からないこんな世界だ。もしもの時に少しでも心の負担を減らせるようにと思って、俺がみんなにＳＮＳの名前で呼び会おうと提案したのである。まぁ、今となってはこっちの呼びの方が気に入ってるし、なんなら本名より愛着があるくらいだ。……正直言うと誰かの名前を覚えるのは得意じゃないし、俺も俺で覚えづらい名前なのでなにかと面倒なのもある。

「そんで？オコサンデーは今日何する予定？」

「あぁ、ちょっと弾の補給に行こうかと思ってな。……主にマシンガン系統の消費が激しくて」

「あっ…ふーん（察し）」

「……？２人してこっちを見てどうしたんですか？」

ミレアに言った通り、今日は弾の補充だ。俺はバールやナタ等といった近接戦闘を得意とするが、おぐりんやミレアは銃がメインの遠距離戦だ。銃弾は消耗品だから定期的に回収に行かないと、もしもの時に無くなってオダブツなんてなったら笑えない。

「今回は俺1人で行く。ミレアとおぐりんは拠点で待っててほしい」
「んー……分かった。じゃあ僕は今まで通り近辺を警戒しとく」
「オコ様……1人で大丈夫なんですか？無理…しないでくださいね？」
二人には拠点に待機してもらって俺は一人で弾の回収することにする。あぁ～、推しがてえてぇ（定期）
……ゲフン、失礼。とりあえず目的地はあの日からずっとお世話になっているガンショップだ。何回か回収に行ったときに分かった事なんだが、あの店は裏のほうに地下倉庫があり、物凄い量の弾薬が保管してあった。……本当に、なんであの店……国から経営許可出たんだろうな……。
道中ゾンビ達を必要最低限減らしていく。ここの道は毎回通る度に倒していってるとゆうのに、どこからともなく湧いて出てくる。地域的な事も考えてここまで出てくるのは明らかにおかしい……。いったいどこからこんな数のゾンビが発生しているとゆうのだろうか。
――ふと目の前からなにか大きなものがこちらへ飛んできた。……あれは……瓦礫か!?
「どわぁ!?……あっぶねェ～、もう少しでサンドイッチになるとこだったわ」
認識してから、当たるスレスレの所で避ける。頭から生暖かいものが垂れてきた。

……今ので額を少し切ったか。――ふと瓦礫が飛んできたほうから血なまぐささが強くなった。

「……は？なんだよ……アイツは…ッ!?」

ソイツはとても大きく、体長は２ｍは超えているだろう。火傷したかのような真っ赤な肌に、パンパンに膨らんだ筋肉質な体。……なによりも目に付いたのはソイツの巨大な異形の右腕。まるで骨がそのまま飛び出てきたかのような不揃いの大きな爪。その爪には大量の血液が付着していた。……あの血が生存者の物なのか、それともヤツらのものなのかは分からないがどの道、ヤツが危険だとゆうことには変わりない。

（アイツはやばい……間違いなくやばい!!……この場はなんとかして逃げないと!!）

「……と思ったけど、そう簡単には逃がしちゃくれねぇってかぁ!!」

「グオ゛ォオ゛オ゛オオオオ゛!!!!」

「うるっさいんだよボケがァ!!」

生き残るにはこの場から逃げないといけない。でもその前になんとかしてアイツの隙を作らないと……。今、俺の手元にあるのは、バール、ハンマー、ナタ、手斧の計四つ。……これならミレアに銃の扱い方を教えてもらえばよかったと今更後悔しても仕方がない。

――覚悟を決めた俺は奴へと向けて駆け出した。

【MISSION1・CYCLOPES】

第五話【絶体絶命】

【拠点・廃協会】

「……オコ様、大丈夫かなぁ」

待機中の【小倉あんこ】が備え付けの椅子に寝転びながら一人呟く。そわそわと落ち着きがないあたり、それ相応に心配しているようだ。

「いや、大丈夫でしょ。オコなんだし。あんこと合流する前は一人でずっと生き抜いてたくらいだし」

「それは……そうですけど……」

一方で、同じく待機していたミレアは、オコサンデーの戦闘を間近で見る機会が多いため、それなりに信用しているようで、逆に落ち着いていた。

「でもおかしくないですか?ミレアとオコ様がここ最近かなりの数のゾンビを倒してるのに、減らないどころかむしろ増えていってる気がするんですよ?」

「……確かに。それは僕も前からそんな気はしてたけど…言われてみれば確かにこれは異常だよね。僕とオコがかなりの数を倒してるはずなのに全滅するどころか、減ってる兆しもないし……」

あんこの意見により、ミレアも改めて違和感に確信を得た。拠点周りのゾンビは毎日掃討している為いなくなったが、他の場所も物資を回収する際にそれなりの数を倒している。場所的にもそこまで人が多く住んでるような場所でもない。先程から感じる違和感を胸に二人はステンドグラスを見上げていた。

【街道・商店通り】

「ぜェ…ぜェ…っ。クッソ！こいつ無駄にしつけぇ！」

「オオオオオオオォ!!!!」

「吠えるしか脳が無ェのかテメェは!!」

あれからどれだけ時間がたったことだろう。何分……何十分……それどころか数時間経過してるようにも錯覚する。バールで殴りかかろうと、ハンマーで潰そうと、ナタで斬りきざもうと、手斧で叩き斬ろうとも……、奴には効かず、潰れず、再生し、刃を止める。それにパワーが尋常じゃない。さっき防御に使ったバールが一撃でオシャカになった。その際に左手が痺れて感覚が麻痺してしまった為、今は右手のナタだけでなんとか耐えている状態だ。

隙を見つけて逃げようが、奴はひとっ飛びで間合いを詰めてくる。……正直言って生存は絶望的。圧倒的な身体能力の差に諦めざるを得ない。

「――でも俺はなぁ?あの日誓ったんだよ…」

あの日、おぐりんを助けた日。眠ったおぐりんの目から一筋の涙が出てた。怖い、助けて…って言ってたんだ……。

「命をかけてでも!あの子を守り通すってなァ!!だから俺はこんな所で絶対にくたばってやらねってんだよこのバァァァァカッ!!」

言葉が通じないのは分かってる。これは俺自身に対する魂の誓いだ。そう簡単にくたばってたまるか!

ウェストポーチから黒い粉だ大量に詰まった袋を取り出して投げる。それを奴は反射的に爪で切り裂き、中身の黒い粉が舞う。……それを待ってたんだ。

「こいつで弾け飛べやデカブツ」

寸前でマッチの火を着け、奴に向けて投げる。瞬間……

――閃光と爆音

凄まじい衝撃により、俺まで吹っ飛ばされる。

奴に投げつけたのは、たっぷりの火薬がつまったミレア特性の爆薬だ。……それにしても凄い威力だな。それなりに離れていたのに危うくこっちまで巻き込まれる威力

だったぞ……。ミレアまじでミレア。
「いッてて……、マジでヒビはいったかも…」
痛む体を引きずりながら爆発で発生した黒煙を見る。ヤツがこっちに来る様子は見えない。あれだけの威力の爆発を至近距離で受けたんだ。倒してなくとも、少なくは再起不能くらいにはなっててほしい。
「…は……はは…。マジかァ……」
黒煙の中から影が見えたと思ったら、ヤツが足音をたてながらこちらへ歩いて来るのが見えた。所々、抉れてたり、体のパーツが吹き飛んでいたりしたが、物凄い勢いで傷が再生していく。

――絶望はまだ終わらない。

第六話【隻腕】

盛大に爆破したにも関わらず、傷を再生させながら歩いてくる奴を見て俺はその場にへたりこんだ。

「クソが……なんだよそれ……！そんなんチートみたいなのアリかよ…」

正直心が折れそう……ぴえん。ってふざけてる場合じゃないか（笑）

なぁ、オコＳｕｎｄａｙよぉ……死ねないし死ぬわけにいかないって、さっき自分に言い聞かせたばかりじゃんか。こっちだってそう簡単にくたばるワケにはいかないんだよ。

奴も相応にダメージを受けているのか、格段に動きが遅い。俺は手元にあるナタを杖にして立ち上がる。

『グゥ……ゴォ゛ォオォ……』

「フゥ～……。全く…、諦めやすいのは俺にとっちゃあ、いつものことだけど……それでも諦めるのはここじゃないよなぁ？」

そう言って俺は奴に背を向けて全力でその場から逃げ出す。あんな勝てる見込みもわからないチート野郎にはまともに相手しないのが１番だ。

先程の大爆発で奴の動きは普段のゾンビ共くらいにとろい。つまりは今がチャンスってことだ。

「へっ！三十六計逃げるに如かずってね！」

幸いにもバイクは爆心地から遠めに停めていたため、多少傷だらけではあるが動かすのに特にこれといった問題もない。急いでエンジンをかけて急発進させる。

「またなクソ野郎!!もう二度と会いたくないけどなぁ!!」

爆速で追い抜く周りの景色と共にサイドミラーごしに、奴の姿がどんどん小さくなっていく。生き残ったもん勝ちだ。文句は受けつけないし言わせない。

――奴とかなりの距離が開き、完全に油断しきってきた。これで奴もここまでは追ってこないし、諦めるだろう。その考えを俺は一生後悔することとなる。

『ゴガアァ〝アァ〝アァ〝アァァ〝アァ〝!!!!』

「なんだ?――がッ?!」

後方から今までにないくらい奴の大きな咆哮が聞こえたかと思った瞬間、体に凄まじい衝撃を受けると同時にバイクが横転し、俺は宙を舞った。不安定な体制でそのまま地面に打ち付けられてクラクラする。

なんだ今の……。まるで何かが飛んできたような……ってそんな事考えてる場合じゃない！バイクはオシャカになったけど体はまだ動けるっ！早く逃げないと！

体を起こすために左手を地面について立ち上がる

――ことが出来ずそのまま横に倒れた。……なんだ？左の感覚が全然無い？確実に嫌な想像が頭をよぎったが迷わず左腕を見た。

「……え？……あ」

そりゃそうだ。無いもので起き上がろうとすればそのまま倒れるのは必然。自覚した瞬間に熱と痛覚が襲う。

「あ〝ぁあああ〝アアア〝アアア!?腕がアアアアアア!!!」

――左腕がなくなっていた。

第七話【仲間】

――左腕が無くなった。

世界がこんな状況だ。いつかはこんなことも起こるだろうと頭の片隅には思っていたが……、いざ実際に体験してみると心は冷静さを無くし、その場に蹲りながら傷口を押さえるしかできない。マンガやアニメみたいに、気にせずに立ち向かう主人公のようなことなんて出来ない。これが現実だ。

「ぐうぅぅ…ッ。畜生……畜生…っ！」

悔しい……今の俺1人じゃ、どうやってもコイツに勝てない。生き残って最後まであの子を守るって決意して、啖呵まできったのに結局こうなってしまった。

すぐそこまで来ているヤツの足音が俺の命を奪う死の音のように聞こえてくる。

顔を上げるとヤツが右腕を振り上げていた。恐らくあの大きな爪で俺を串刺しにするつもりなのだろう。

「……はは。上等だよ……その面、頭の中に焼き付けて……死んだとしても……いずれお前を呪い殺してやる…」

覚悟を決めてヤツを睨みつけながら、その瞬間をじっと見つめた。

――次の瞬間、何十発もの銃撃音がした。

そして、ヤツの体から無数の血が飛び散り、その体をよろめかせて後退した。

「オコ!!大丈夫か!?心配になって追っかけて来たんだけど、何この化け物は!?」

振り返ると銃を構えたミレアとおぐりんがいた。

ミレアはこの現状を見て珍しく声を荒らげている。一方でおぐりんは顔を真っ青にしてこちらへ駆け寄ってきた。

「いや……オコ様……その腕……」

無くなった俺の左腕を見て手当しようとしているが、かなり動揺しているのか涙目になりながら震えている。

「あはは～……、ごめん。ドジっちゃった」

安心させようとして無理やり笑顔を作るが、逆効果だったようでポロポロと涙を流し始めた。

「もう!だから何度も無茶しないでくださいって言ったじゃないですか!!こんなになるまで無理して……体もボロボロになって……腕だって……こんな……」

「あんこ！オコ！お話しするのはいいけどまずはアイツを何とかしてからだぞ!!」
ミレアに言われてヤツの方へ目を向けると、傷口を異常な速度で再生しながらゆっくりとこちらへ歩いてくるヤツの姿を確認した。
「りょーかい。…ごめん、おぐりん。お説教はあとで聞くからさ。止血と手当お願い。包帯グルグル巻きでいいから」
「グスッ……わかりました。でも、ほんとにあとでお説教ですからね！」
ミレアに足止めしてもらってる間に、傷口に大量のガーゼを当てて包帯を巻いてもらった。
この2人が来てくれたんだ。1人だったら諦めてたけど、今は1人じゃない！
「俄然やる気出てきた!!」
左腕が無くなった？まだ右腕が残ってるじゃないか。
まだ立ち上がれる
まだ武器を握れる
大事な仲間がいる
俺は1人じゃない

――だったら最後の最後まで足掻いてみようじゃねえか。

「そんじゃ、まぁ―」

ミレアはスナイパーライフルを、おぐりんは二丁のサブマシンガンを、俺は持っていたナタを握りなおしてヤツへ刃先をヤツへ向けた。

「スリーマンセルで第2ラウンドだ!」

第８話【喪失】

ミレアとおぐりんが戦いに加わってから、戦況が大きく傾いた。

「頭をぶち抜くッ」

ミレアが頭部を中心とした狙撃で注意を惹き――

「どこを見てるんですか？」

おぐりんが大量の弾幕で動きを鈍らせ――

「っしゃオラァ!!足元がお留守じゃあああ!!」

俺が隙をついて斬る。

そして、この戦いで気づいたことが１つある。

ヤツは大なり小なり傷がつけば再生する。その時、少しではあるが肉質が全体的に柔らかくなるのだ。お陰様で１人のとき弾かれてたナタが面白いくらいにサクサク入る。

しかしそれでも一筋縄ではいかず、足の靭帯を斬って膝をつくまではもっていけるが、頭部をカチ割ろうとすると異常な程に大きな腕を振り回して妨害してくる。非常に厄介極まりない。

「あー！！もー！！オコ!!こいつメンドイ！」

「しゃーないだろ！俺だって1人で頑張ってたけど、コイツすぐに再生するんだって！」
「オコ様ぁー！弾無くなっちゃいましたー！」
「オイイイイイイイイイイイイ!?確かにあの弾幕攻撃はありがたかったけど、よりによってこのタイミングぅ!?」
「そんな事だろうと思って予備のマガジン持って来てるよ」
「ミレア、ナイスー！」
なんだろう……。さっきまでシリアスな雰囲気だったはずなのにいつの間にかコミカルになってない？いやまぁ、殺伐とした雰囲気よりはマシだけども……。なんなら順調にじわじわとヤツの動きが鈍ってきているあたり、ものすごい手応え感じてるくらいだし。
それにしてもあのデカい腕が邪魔すぎる。爪が異様に鋭いうえに長いから、至近距離で戦ってる俺の服が切り跡だらけだ。幸いにも肌までは傷はついてないので今のところ感染するリスクは低い。
『オ……グオオ……ッ』
「……ん？なんだ？」
なにか様子がおかしいと思ったら、ヤツの大きい腕がまるで虫が這っているみたいでグロテスクに蠢きだした。ものすごく気持ち悪い。

『……オオ゛オオオ゛オオオ゛オ゛オ゛ッ!!!』

ヤツがひときわ大きく吠えた。

骨と肉が混ざってるような音をその大きな腕から響かせたと同時に、異常な速度でヤツの腕が更に大きく、太く、鋭くなっていく。

肩から骨のような角が皮膚を突き破り、二の腕は裂けて二本に分裂し、二本に別れた右腕の先には合計１０本の爪が先程よりも大きく鋭利になった。

……明らかに第二形態ですねわかります。

「ここで一つ。第二形態とかけまして、スゴロクととく」

「……その心は？」

「どっちも、ふりだしからでしょ～」

「上手い！」

「ＨＡＨＡＨＡ！」

「いや、なぞかけしてる場合じゃないんですけど!?２人して現実逃避しないでくれませんか!?」

おっと失礼。あまりにもショッキングすぎて現実逃避してたわ。

だってアレはさすがに無理だろ～…。明らかに俺達を絶対殺してやるとばかりに殺意をビシビシと肌で感じる。

――――ミレアが消えた。

いや、正確には吹っ飛んだんだ。後方へと。

「「ミレアッ!?」」

「がァっ!?……ぐぅうううう…ッ!」

ミレアが後方へ飛んだ先に瓦礫の山があり、そこへ背中を打ち付けてしまったみたいだ。とっさにガードしたのか、頑丈なはずのスナイパーライフルがありえない方向へと曲がってしまっている。幸いにもライフルが犠牲になったおかげでミレア本人は打撲だけで済んでいた。

なんだ今のは!?全然見えなかった……。

しかも俺たちがいる場所とはそれなりに離れていたはずだぞ!?

右腕の二本に別れた片方の腕が触手のようにうねうねと軟体動物かの如く動いている。まさか……あの触手のような腕がゴムのように伸びて一瞬でミレアを攻撃したとゆうのか!?俺たちに視認できない速度で……!?

『グロロロロロロ……』

そう呻いたヤツの顔は笑っているように見えた。

……いや、明らかにこちらを嘲笑っている。

「テメェ……何笑ってやがんだァァァァ!!!!」

「オコ様！ダメ!!」

我慢できなかった。お前らなんぞこの程度だ、と言われているみたいに思えて頭の中の何かが切れたんだ。

怒りの衝動と共に馬鹿正直にヤツに向かってナタを振り下ろした。

――ナタが折れた。

「……え？」

全力で切りつけたつもりだった。だが、その刃はヤツの肉を切り裂くことは無く、まるで鋼鉄に打ちつけたかのような感覚と共にナタは根元からポキリと折れてしまった。

その一瞬で惚けてしまったのは完全に致命的だった。

ヤツの二本に別れていた右腕が交差して、1本の束のようになった肥大化したその腕で俺は殴られた。

「ごぶゥ……ッ!!」

殴られた俺の体は簡単に宙へと飛ばされ、その拍子に内蔵をやられてしまったのか大量に吐血した。そのまま地面へと叩きつけられ、ボールのように2、3回バウンドしながら後方へと飛ばされた。

……ダメだ……今意識を失ったら……おぐりんが危ない……ッ。

それだけはダメだと、痛む体に鞭を打って無理やり立たせる。足が産まれたての小鹿のようにガクガクと震える。

ミレアの方を見ると、使い物にならなくなったライフルを杖の代わりにして立ち上がっていた。

先程の早さで攻撃してこなかったとゆうことは、こちらを完全にバカにしているうえに舐め腐ってる。

クソがッ！舐めプしてんじゃねぇよッ！

待てよ……まずい！今前にいるのはおぐりんだけだ！

前へ振り向くとヤツがおぐりんに向けて、その大きな爪で貫こうとしているのが見えた。

「あ……あぁ……あ……ッ」
ヤツの威圧感と殺気で声も出せない状態になっている。
俺は軋む体を無理やり動かして、おぐりんの元へとその足を走らせる。
頼む!!間に合ってくれ!!
ヤツは無慈悲にもその爪をおぐりんへと振り下ろした。

「オコ……様?」
「ははっ……良かった……。間に……合っ……た…」
突き飛ばしたおぐりんが呆然とこちらを見ている。
腹が熱い……喉から何か熱いものがまた込み上げてきた。
「ゴバァ……ッ!!」
――おぐりんへ矛先を向けていたその爪は、突き飛ばしたおぐりんの代わりに俺の腹を貫いて真っ赤になっていた。

「オコッッ!!!!」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッ!!!!!!!」
２人の悲鳴が響く。
ヤツがその方向を見るがそうはさせない。俺はヤツの腕を掴み全力で抑え込む。俺の頭のリミッターが外れたのか、ヤツも上手く身動きが取れないほど力が出ているようだ。
「ミレア……頼む……このままおぐりんを連れて……逃げろッ！」
「オコ……でも……ッ」
「いいから行けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!」
俺は振り絞って声を荒らげた。
「ッ！……分かった。行くよあんこ」
「嫌っ！いやぁ!!だって……だってオコ様が!!」
「このままじゃ全滅だって！オコの覚悟を無駄にする気!?」
「いやぁ！オコ様ァァ!!」
ミレアがグズるおぐりんを引っ張って遠くへ離れていく。
そう……それでいいんだ……２人だけでも生きてくれ……。
２人が小さくなるまで見守ったあと、俺はヤツへと向き直る。

『グウウウウ……ッ！』
「よぉ……随分と……お行儀がいいじゃねえか……。……って俺が抑えてたから動けねぇのか……すまんすまん」
笑いながらそう言うと、ヤツの俺を見る目がとんでもない殺意で満たされた。
……そうだ、それでいい。俺を見ろ。そうすればアイツらは安全に遠くへ逃げることができるからな。
こんなこともあろうかとさっきミレアのバックからくすねといて良かったぜ。
俺はズボンのポケットからミレア印の爆弾を取り出してヤツの口へとねじ込んだ。
「こうすりゃあ流石のお前も再生出来ねぇだろ？」
『ゴ……ォ……』
「……あばよ」
そのままマッチで火を灯し――

――閃光と爆音に包まれた。

第８．５話【小倉あんこの追憶】

私が彼と……オコＳｕｎｄａｙ様と知り合ったのはＩＲＩＡＭ（イリアム）とゆう配信アプリからでした。

配信を始めて１ヶ月くらいだった頃、怪談話の枠を開いているときに彼がやってきたのです。それからとゆうもの、数日の間出たり入ったりして不定期に入ってきてくれましたが、いつの間にかほぼ毎日来てくれるのが当たり前こようになっていました。

ときには一緒にゲームをしたり、リアルで落ち込むことがあって心配してくれたり、面白い話を聞かせてくれたりと――まるでそこにいるのが普通だと言わんばかりに毎回来てくれていました。

――そして、あの日。世界が地獄に変わった日から、私は近くのスーパーの屋上にたてこもって数日間……１人で不安に押しつぶされそうになってたとき……Ｔｗｉｔｔｅｒから一通のＤＭが入りました。

オコＳｕｎｄａｙ：

［おぐりんそっちは大丈夫!?やばかったら迎えいくけど!?］

まさかのあの人からでした。あっちも相当過酷な状況かもしれないのに私にＤＭを送ってくれたんです。それでも私は藁にもすがる思いで返信しました。

小倉あんこ：

［今、屋上でたてこもってます。……助けて］

祈る思いで返信すると、すぐに返信がきました。

オコＳｕｎｄａｙ：

［了解。明日までにはつく。それまで頑張って生き延びててほしい］

そしてあの人は本当に私の所まで助けに来てくれました。この場所まで数百キロあるであろう距離を。

お互いに初めてリアルで顔を合わせるけど、それよりも助けに来てくれた安堵でそのままオコ様の胸に飛びこんで泣きました。

うぅ……今となってはちょっと恥ずかしいです。

合流してからとゆうもの、脱出する際のオコ様の快進撃はとても凄かったとしか言いようがないです。

工事現場の人が使ってるような道具で、ゾンビ達を蹴散らして出口への道を切り開いていきました。……正確には殴り倒すですけど。

それからはあの人が乗ってきたバイクに乗せてもらってその場を後にしました。後ろを振り向くと私がいたデパートがどんどん遠くなっていきます。

本当に生き残れたんだとゆう実感が湧いてきて、オコ様の背中により強く抱きつきました。

「ヒョッ!?」と奇声をあげながら体を震わせるオコ様の背中を見て、くすりと笑ってしまったのはナイショです。

街を抜け、都合よく武器を手に入れ、安全地域も確保して、新しくミレアも仲間に加わり、全てが順調に思えました。

……でもその思いは全部ダメになってしまいました。

オコ様が珍しく1人で物資を――弾薬を回収してくると言いいました。虫の知らせでしょうか……なんとなく嫌な予感がしましたが、ミレアも私も弾薬だけだしオコ様だからと完全に油断してそのまま1人で行かせてしまったんです。

……それがダメだったんです。

いつもなら３０分以内で帰ってくるオコ様が、１時間以上経っているのに未だに帰ってくる気配がしません。さすがに様子を見に行った方がいいんじゃないかとミレアに声をかけようとした瞬間、とてつもない音量の爆発音が耳を刺激しました。

「この爆発音は……ボクの作った爆弾ッ!?あんこ行くよ!」

私はミレアに言われるがまま武器を持って、オコ様が居るであろう場所へと足を走らせました。目的地に近づくほど、私の中にある不安の波紋は大きく広がっていく。

そしてやっとオコ様がいる場所に着くと、２メートル以上はあるであろう化け物と……

左腕を無くしてうずくまるオコ様がいました。

私は頭が真っ白になってその場に立ち尽くしました。すると横から化け物の頭部を狙い撃ったミレアに、オコ様の元へ行くように指示され、涙が流れないようにぐっと我慢してオコ様を治療しました。

なんでもないと無理して笑うオコ様があまりにも痛々しくて、私は涙をこらえきれませんでした。

そんな大怪我を負っても、オコ様はまだ戦うと言って、そのまま化け物へとかけだしました。だから私も必死にオコ様を後ろから援護しました。少しでも注意がオコ様からこっちにいくように。

敵の動きがだんだん鈍っていき、希望の光が見え始めたとき……私たちはまた絶望におとされました。敵の姿がより凶悪的な物に変わり、素早さもパワーも以前よりも強靭的に跳ね上がりました。

ミレアも吹き飛ばされ、オコ様も武器が折れて殴りとばされました。

前に残った私は、化け物がその凶悪な爪でこちらを貫こうとしているのを見ていることしか出来ませんでした。その爪が振り下ろされると同時に目を閉じた私は、誰かに突き飛ばされ、その場から離れた場所へと倒れ込みました。とっさに突き飛ばされた場所を見て、

――なんで化け物の爪がオコ様のお腹を貫通してるんですか？

そのままオコ様は化け物をすごい力で抑えこみ、私たちに逃げろと叫びました。私はなすすべもなく、ミレアに引きずられながらその場にオコ様を置き去りにしてしまいました。

そしてまた凄まじい爆発音が私たちを振動させました。

待って……この爆発音……オコ様の方から……まさか!!

「ちょ！あんこダメだって!!」
私はミレアの手を振り払ってオコ様のいる場所へと走りました。無事であって欲しいと願いながら。
でもそこには化け物であっただろう下半身しかありませんでした。
……いえ、本当は少し遠くに見えてました。
――おそらくオコ様のであろう右腕と愛用していたジッポライターが。
「……あ」
私は震える手でその腕とライターを一緒に抱きかかて、その場に膝をついてしまいました。
「あんこ……その腕……とゆう事は……オコは……」
頭の中で違うと否定したかった。でもこの手の形は……この手のひらのマメのでき方は……完全にオコ様のだと理解してしまう。
「…うあああああああああああぁぁぁぁッ!!」
「オコ……オコ兄ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッ!!」
私が泣き叫んでも……、ミレアが名前を呼んでも……、返ってくるのは静寂とゆう残酷な現実だった。

――私は……この日、大切な人を失った……

閑話【日常編】

〈からかい上手のおぐりん〉

　安全地帯の教会を見つけて間もない頃…。

「オコ様ァ～、こっちの野菜の種の分は終わりました～」

「おー、おぐりんセンキュー。そんじゃあシャワー浴びてきなよ。この暑さで汗かいただろうし、土いじりで汚れたでしょ」

「ありがとうございます。それじゃあお先にシャワー使わせてもらいますね。……あ、オコ様～！」

「ん？なーにー？」

「オコ様も……一緒に入りますかぁ？」

「んな!?……ば！馬鹿言ってんじゃないよ！いいから早くシャワー浴びてきなさい!!」

「はーい」

「……全く、歳上をからかいやがって」

『本人もああ言ってるんだし、チョロっと覗くくらいいいんじゃね？』

「黙れ悪魔の俺！その手には乗らんわ！」

『そうです。推しとは影からこっそり支えるもの。悪魔の誘いに乗ってはいけません』
『出やがったな天使の俺！……でもよく考えてみろ？お前の最推しの裸見たくねぇのかよ？本人も良いって言ってたしちょっと覗くくらいバチなんて当たらねぇよ』
『……推しとは影から支え、見守るもの。だから例えそれがシャワー中だろうと例外ではありません。さぁ、行くのです俺よ』
「オイイイイイイ!!天使がそっち側に寝返ったらダメだろーが！なに欲望に素直になっちゃってんの!?絶対に行かねぇかんな!?」
「……オコ様1人で何をブツブツ言ってるんだろう？……あ、そーだ」
「オコ様～♪えいっ♪」
「え!?ちょっ!?おぐりんなにを!?」
「ぎゅ～♪」
「（鼻をくすぐるいい匂い……そして背中に当たるこの柔らかい感触は……）」
「『『ゲボはァ!?』』」←吐血
「きゃ!?お、オコ様？大丈夫ですか!?」
「『『……わ、我が人生に一片の悔いなし』』」
結論。おぐりんは結構イタズラ好き。

〈リアルおとこの娘降臨〉

　これはミレアが俺たちと仲間になったときの話。

「今日は天気もいいし、ちょっと遠めに物資調達にいくよ」

「はーい、わかりましたー」

「ここのスーパー初めて来たけど……地味に数が多いな…。できるだけバレないように片付けていくから、おぐりんは周囲の警戒をお願い」

「戦わないってゆう選択肢は無いんですね～……」

「あ、言っておくけど、今回はそのマシンガン使用禁止ね？」

「どうしてですか!?」

「音で外のゾンビが寄ってくるし、弾薬が勿体ない」

「あ、ハイ」

「オコ様！こんな所に女の子が!!」

「なんだって!?すぐそっちに行……」

　――ドッガラガラガッシャン!!

「オコ様あああああああ!?何やってるんですかぁ!?」

「……テヘペロ♪」

「テヘペロじゃないですよぉ!!ってめちゃくちゃこっちに来てるうううう!!」

「やっちまったもんはしゃーない！やるっきゃないでしょ！」

——タァン！タァン！タァン！

「……え？」

「う、嘘だろ？たった3発でほとんどのゾンビを同時に撃ち抜いただと!?」

「……うるさくて寝られないんだけど？」

「え？……その声……まさか男ォ!?」

「いや待て……その声……もしかしてミレアか？」

「……え？待って。もしかしてオコ兄？……ってことは」

「そう、おぐりん」

「え!?この子ミレアなんですか!?」

「みたいだな。……それにしても……リアルでもおとこの娘とは……こりゃまたたまげたなぁ」

「あ、それ私も思いました。リアルなおとこの娘を生で見るのは初めてです」

「可愛いなぁ」

「うっさいよ2人とも!!それよりも後ろのアイツらどうにかして!?」

「っしゃオラァ!!」

「って、まとめて串刺しにしたあああああああ!?普通出来るものなのそれ!?」

「……ミレア、諦めましょう。オコ様だからとゆうことで理解すればいいんです」
「出来るかあああああああああ!!」
こうしてなんだかんだでミレアが仲間に加わりましたとさ。

第９話【救済】

――ここは……どこだ…？

目の前の化物共を、ブレード状にした両腕で切り刻む。

――なんで……ここにいるんだ…？

横から迫る、２ｍ越えの化物が突進してくる。

ジャンプで飛び越え、ブレードを脳天に突き刺す。

ひと息つくのもつかの間、奥の方から化物共の大群が押し寄せてくるが、俺の後方には避難した生存者達がいる病院がある。

その中には、絶望した大人や、明日に怯える子供がいる。……負ける訳にはいかない。

「ここを通れるなら通ってみろよ？その代わり……ぶっ殺すけどな？」

――誰が知っているなら教えて欲しい……

「って、もう死んでるんだっけ？…んまァ、どうでもいいか」

――俺は……誰なんだ？

〈拠点・教会〉

仲間が１人死んだことにより、ミレアとアンコの２名は、ショックが大きく、お互いに数日間塞ぎ込んでいた。

だが、その現状から先に復帰したのはミレアだった。

――あの人は自分達を守る為に命をかけた。だから自分達は生き延びなきゃいけない。……と。

そう言ったミレアの顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。そうして２人は身を寄せ合い、ひたすら泣いた。泣いて泣いて……声が枯れるまで泣いた。

いつの間にか２人は泣き止んでいた。２人の目には決意が宿っていた。

――あなたが守ってくれたこの命……絶対最後まで生き延びてみせるから。

■――■

――それから２ヶ月の月日がたった。

激しい銃撃戦の音が鳴り響く。しかしそれは一方的なものであった。

「ふぅ……。こちらアンコ、化物の駆除終わりましたよー。ミレアのほうはどうですかー？」

おびただしい化物共の残骸を前に、アンコは無線で通信を入れた。
その両手には、前よりも新たなサブマシンガンが握られている。
〈スコーピオンＥＶＯ３〉軽量性と携行性に優れており、泥水や水に浸かっても使えるので、例えアンコがドジっても使える１品である。
『こっちも雑魚ばっかだから、すぐ終わったよー』
通信先のミレアの周りにも、化物の山がいくつも出来上がっている。
ミレアのその手にも、新しいスナイパーライフルが握られていた。
〈バレット　Ｍ８２〉簡単に言えば、軽車両の装甲をぶち抜く威力がある、アンチマテリアルライフルだ。射程距離は２５００メールまで及ぶ。
『こちら青空、化物共は完全沈黙した』
『こちらツバメ、同じくこっちも全部殲滅完了ゥ！』
『プルレよ。こっちはあともう少しで終わるから。そんで、あんた達は手が空いてるならこっち手伝いなさい』
あれから仲間も３人増えて、今じゃ生存者も救助出来るくらいには戦闘力も増した。
〈部隊アウロラ〉――ラテン語で夜明けを意味するこの部隊は、現在［小倉あんこ］、［魅魔（すだま）ミレア］を筆頭に、［青空］、［ツバメ］、［プルレ］の５人で形成されている。
数こそ少数であるが、ひとりひとりの戦闘力が高く、数多くの化物共を葬っている。

――が、ゾンビの数は減るどころか、ここ最近は人型ですらない化物まで出てくる始末。
幸いにも、空気感染することは無く、傷を負うことによる接触感染でなければ感染はしないようである。
――まだまだ夜明けの光は遠く離れていた。